三八〇七番

安積香山　影さへ見ゆる　山の井の　浅き心を　我が思はなくに

右の歌、伝へて云はく、葛城王、陸奥国に遣はされける時に、国司の祗承、倦怠なること異に甚だし。ここに王の意悦びずして、怒りの色面に顕われぬ。飲饌を設けたれど、肯へて宴楽せず。ここに前の采女あり、風流びたる娘子なり。左手に觴を捧げ、右手に水を持ち、王の膝を撃ちて、この歌を詠む。すなはち王の意解けて悦びて、楽飲すること終日なり、といふ。

三八〇八番

住吉の　小集楽に出でて　現にも　己妻すらを　鏡と見つも

右、伝へて云はく　昔鄙人あり、姓名未だ詳らかならず。ここに郷里の男女、衆集ひて野遊す。この会集へるが中に鄙人の夫婦あり。その婦容姿端正しきこと、衆諸に秀れたり。すなはちその鄙人の意に、弥妻を愛しぶる情を増す。すなはちこの歌を作り、美貌を讃嘆す、といふ。